

タイトル…『フアニーたい焼きトム35
チャプチェ』

第一幕：奇抜な発想

シーン1：オープニング

（都内の商店街。『たい焼きトム』の看板が目立つ。看板には「おもしろたい焼き専門店」と書かれている。）

トム（陽気に両手を広げる）：「グッド
モーニング、たい焼きラバーズ！今日も
元気にフアニーでデリシャスなたい焼き
をお届けするよおー！君たちの常識をブ
チ破る、そんな一日が始まるんだ！」

魚住（眉をひそめて）：「また変なこと
考えてるんですね…。なんか今日はいつ
もよりテンション高くないですか？」

トム（ウインクしながら）：「イエス！
今日はね：チャプチェたい焼き！」

（魚住、手を止める。数秒沈黙した後、額に手を当てる。）

魚住：「……チャプチェ？たい焼きに？」

トム（ドヤ顔で腕を組む）：「そう！なぜならビビンバはありきたり、キムチも普通、だからこそチャプチェなんだよ！春雨のもちもち感と甘辛い味わい、野菜のシャキシャキ感、それをたい焼きの香ばしい皮で包み込む…考えただけでヨダレが出るでしょ？」

魚住（溜息）：「お客さん、そんなに食べたいと思いませんか？？」

トム（自信満々に）：「食べたいかどうか？違う違う、食べたら衝撃を受けるんだよ！もう二度と普通のたい焼きには戻れない…そんな革命的な一品さ！」

（トム、派手にポーズを決める。）

魚住（苦笑）：「……そこまで言うなら、
試作しましょうか。」

（トムと魚住、試作に取り掛かる。）

第二幕：チャプチェたい焼き 爆誕

シーン②：試作

（キッチン。トムがフライパンでチャプ
チェを炒めている。魚住はたい焼きの生
地を準備中。）

トム（鼻をクンクンさせながら）：「あ
あ…このゴマ油の香り！ニンニクのパン
チ！タレが絡んだ春雨が、まるで黄金の
糸みたいに輝いてる！」

魚住：「たしかに美味しそうですけど…
たい焼きに合うんでしょうか？」

（トム、チャプチェを高く持ち上げる。）

トム：「合うに決まってる！この甘辛い味わい、ジューシーで噛むたびに染み出す旨味…これがカリッと焼かれたたい焼きの皮と融合したら、もう…！」

（たい焼きの生地にはチャプチェをたっぷり詰め、焼く。店内に甘辛い香りが充満する。）

魚住（目を丸くする）：「うわ…想像以上にいい匂い…！」

（たい焼きが焼き上がる。二人で一口試食。）

魚住：「…え、美味しい?!」

トム（ガッツポーズ）：「だろ!？」

（トム、拳を握りしめガッツポーズ。）

トム：「じゃあ、いざ販売だ！」

第三幕：販売開始とカオスな客たち

シーン③：最初のお客さん

（店の前。『新作！チャプチェたい焼き！』と書かれた派手な看板が登場。通行人が看板を見てざわめく。）

通行人▶：「チャプチェ…たい焼き…？
何それ？」

通行人♫：「おいしいのかな？」

（最初にやってきたのは、常連の中年男性・村田さん。）

村田：「トムくん、今日の新作は？」

トム：「チャプチェたい焼きだよ！」

（村田、目を丸くする。）

村田：「……チャプチェって、あの春雨の？」

魚住：「はい：春雨の、あのチャプチェです……。」

（村田、腕を組みしばし考えた後、決意した表情でうなづく。）

村田：「よし！一つもらおう！」

（たい焼きを受け取り、一口かじる。沈黙。）

（トムと魚住、固唾をのんで見守る。）

（村田、目を閉じる。）

村田：「……え、ウマッ！！このジュシーな春雨、甘辛いタレが皮に染み込んで：サクサクの生地がまるで天使の羽みたいに軽い！」

（通行人たちがざわめく。）

通行人○：「えっ、美味しいの？」

通行人□：「試してみるか：。」

（次々と注文が入り、列ができ始める。）

第四幕：緊急事態と驚愕の救 援

（店内、大混雑。注文が止まらない。）

魚住：「トムさん！春雨が：もうありま
せん！」

トム：「WHAT!?! NOOOOOOOO!! この
ままだと：お客さんが暴動を起こす！」

（村田がスマホを取り出し、謎の電話。）

（数分後、遠くからへりの音が響く。空
を見上げると、一機のへりがこちらに向
かってくる！）

通行人たち：「えええ！？」「何事だ！？」

「映画みたい！」

（へりが店の上空でホバリングし、ロープで巨大な春雨の袋が降ろされる。村田が華麗に着地！）

村田：「トムくん、補給完了だ！」

トム：「村田ア！お前ってやつは最高だぜ！！」

（周囲の客たち、大歓声。）

（トム、春雨を受け取るとその場でチャプチェを炒め始める。）

トム：「みんな！待たせたね！今から奇跡のチャプチェたい焼きを焼き上げるよ！3分で提供する！さあ、ワクワクしながら待っていてくれ！」

（店の前でお客たちが拍手しながら待つ。）

第五幕：新たなる挑戦

（夕日を眺めながらたい焼きを食べるトムと魚住。）

トム（しみじみ）：「今日はすごい一日だったなあ。へりまで飛んで、まるでハリウッド映画みたいだった。」

魚住（苦笑しながら）：「ほんとに、やるのがいちいち大げさすぎるんですよ…。」

トム（真剣な表情）：「でも、食の革命は派手な方がいいんだ。想像してみても、次は…ピピンバたい焼きなんてどうだろう？」

魚住（呆れながら）：「もういいです!!!」

（トム、びくっとしてたい焼きを落とすようにする。）

トム（苦笑しながら）：「でもさ、魚住：やっぱりピピンバも捨てがたいんだよ。あのピリ辛の牛肉ととろける温泉卵をたい焼きの中に…」

魚住（一喝）：「やめてください！！！」

（トム、ぎょっとしてたい焼きを頬張る。）

（トムと魚住、笑いながらたい焼きを食べる。空には美しい夕日。）

（幕が下りる。）

（終わり）